



天体力学や考古学，古代天文学の権威であった長谷川一郎先生が5月1日に亡くなられた。享年88歳。先生は，大阪西教会の牧師さんであった長谷川計太郎氏の長男として，1928年1月23日に兵庫県西宮市で生まれた。その後，神戸の湊川教会（現，須磨月見山教会）に移られた。先生は，そこで1960年に奥様通子さんと結婚され，1965年まで青年期を過ごされた。その後，奈良市西大寺に1988年までお住まいになられ，以後は，今の神戸市北区に転居された。



先生は，1932年に洗礼を受けられており，その前夜式と葬儀は，先生が青年期に過ごされた須磨月見山教会で行なわれた。私は，その両方の式に出席させていただいたが，いいキリスト教での葬儀であった。先生には，軌道論以外にも，社会論，人生論，いろいろなことを教えてもらった。なによりも，生涯，父に嫌われていた私にとって，先生は私の父と7歳差，しかも，誕生日は1日しか変わらず，私にとって，父親以上の人生の師でもあった。ご冥福をお祈りします。

写真1.

ありし日の長谷川先生（ニューデリーIAU 総会，1985年）

先生の死を知ったのは、5月1日夕方、神戸の大西道一氏から携帯に電話があったときだった。携帯の名前の表示を見て、私には、何の電話かは、すぐわかった。というのは、その日の深夜02時ごろに自宅の西のガーデンテラスで、バスルームのガラス窓の前にゴーヤの蔓（つる）をからませる網張をしていたとき、ふと、空を見上げた。そこには真黒の快



先生ご夫婦（IAU ハグー総会，1994年）

晴の空に星がまばゆく輝いていた。そのとき、『なんてきれいな星空だ。そういえば、楽し



みにされていた彗星カタログの見本をだいぶ前に大先生に送った。でも、何の返事もないや。PDF だったから気づかなかったのかなあ…。見てくれたのかなあ……。』と先生を思い出していた。大西さんからの電話は、案の定「長谷川先生が今朝02時10分に亡くなった」との連絡であった。『やっぱりそうか……。』と思いながら、氏のお話を聞いた。葬儀の際の牧師さんの追悼では、先生は、4月26日に内視鏡による手術を受けられ、術後は「まだまだ、生きられる」と力強く話しお元気であった。しかし、その後様態が急変し、5月1日02時10分に亡くなられたとのことだった。

写真2. 葬儀が行なわれた須磨月見山教会



写真3. 第3回彗星夏の学校に出席された先生（1978年）

先生は、1976年に「長周期彗星の遠日点分布」の研究で、京都大学より理学博士の学位を受けられた。また、後進の指導にも熱心な先生であった。特に手紙については、必ず返信を出されるほど、すべての方に公平な指導をされた。そのおかげもあって多くの後達が育った。さらに各地で開催された小さな研究会、同好会の会合、さらにアマチュア天文台などの開所式にも、進んで出席されるなど、若い方の指導に熱心な先生であった。私も、いつも多くの会合

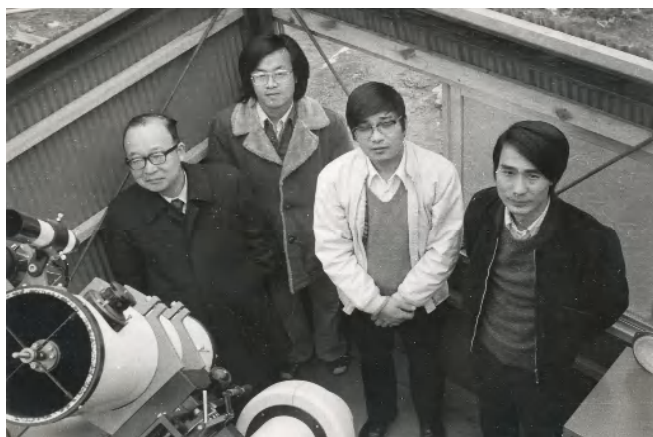
に引き釣り回されたが、先生のこの姿には、当時より頭が下がる以外、私には言葉がなかった。

先生の執筆された書籍には「星空のトラベラー(1975年, 誠文堂新光社)」、「天文計算入門(1978年, 恒星社厚生閣)」、「彗星カタログブック(1982年, 河出書房新社)」、「天体軌道論(1983年, 恒星社厚生閣)」、「ハレー彗星物語(1984年, 恒星社厚生閣)」などがある。特に最後の書籍は、先生の集められた多くの資料をもとにハレー彗星の紀元前の出現からその状況がくわしく解説されている大作である。また、きわめて多数の研究論文も発表されている。

特筆すべきは、これらの書籍とは別に1969年から約10年間、軌道計算を志す同好者に先生独特の細かな字で手書きの「天体軌道論」を配布されたことだろう。当時は、普通紙コピーが普及しておらず、湿式のジアゾ式複写機による配布であった。今、それを重ねて測ってみると12-cmにもなる大作である。配布は、静岡の浦田武氏(のちに群馬の伊野田繁氏)によって行なわれたが、今は、両氏とも故人となっている。また、先生は、当天文学会評議委員、山本速報の編集者、東亜天文学会(OAA)計算課長、会長を歴任された。

さらに先生は、新しい資料を収集することにも熱心で、1984年に運用を始めたパソコン通信OAA/CSにも、開設当初からアクセスされて、亡くなられる間際まで「きみの計算した軌道しか採用しなくなったよ」と話されながら、毎月、ご自身の彗星の軌道リストを更新

されていた。いずれにしろ、私にとっては、知らないことのない天体の軌道計算の大家、まさに大先生であった。



小淵沢観測所開所式にて(1976年。左より、先生、故番野欣昭氏、故浦田武氏、私)

だ、京都大学の出版物で、中々、手に入れることができず、1974年になって、ようやく先生から別刷りをいただくことができた。このカタログは、いまだに私の手の届くところに大事に置かれている。なお、先生は、1979年に古記録に現れた多くの彗星について、その



写真4.

1989年3月に開催された第5回小惑星会議にて。左から私、長谷川先生、故バードウェル小惑星センター副局長。このとき、先生は、副局長の講演の通訳を担当された。

ところで、1972年に故マースデン博士によって「彗星カタログ」が発行されるまで、1960年代には、一般人が手に入れられる彗星カタログは、英国天文教会の彗星カタログ(1960年発行)とその増補版(1965年)くらいであった。1967年になって、先生は、周期彗星のカタログを出版された。このカタログは、当時としては、めずらしく電算機(コンピュータ)の出力をそのまま印刷したものであった。た

出現位置を解析し、その軌道を決定して、日本天文学会欧文報告 (PASJ 31, 257) に発表された。これらの軌道は、マースデンの彗星カタログ (1982 年発行第 4 版以降) に採用されている。先生の軌道は、今では、誰も計算が行なえない貴重な資料となっている。

さて、先生との最初の出会いは、1964 年 8 月 5/6 日に和歌山県金屋町で開催された第 5 回流星観測者会議であった。この会議は、若干 16 歳の私が初めて出席した大きな星の会であった。当時、紀勢本線には汽車がまだ走っており、天王寺 (大阪) から汽車に乗って行ったことを覚えている。実は、この 1 年前の 1963 年に金



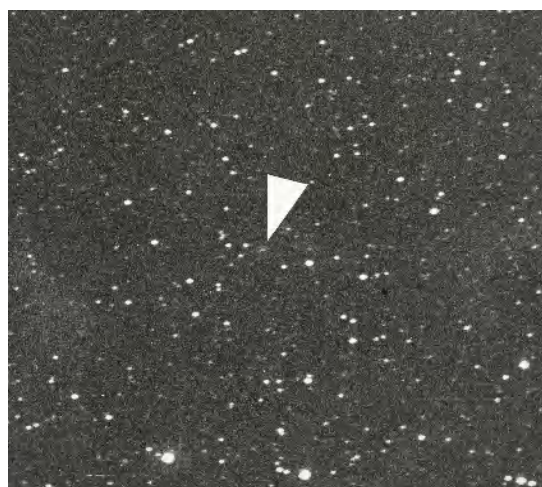
写真 5. 第 5 回流星観測者会議, 1964 年 (金屋)

屋の故小楨孝二郎先生と電話で話したことがある。そのとき、通話を頼んだ電話局 (電電公社) から「洲本局から金屋局に接続したことはありません。もし、話せなかったら料金は必要ありません」と言われた。とにかく、日本は、まだ、そういう時代であった。続いて、お会いしたのは、同じ年 8 月 30 日に神戸で開催された OAA 総会であった。どちらの会議でも、先生は、どの研究発表についても、意見 (苦言) を言われていたことを覚えている。私は『何てうるさい人だ。何もそこまで、けなさなくってもいいのに……』と思ったものだ。

その先生に 1966 年に出現したキルストン彗星 (C/1966 P1) の観測を送ったことがある。先生は、それを山本速報 No.1657 で取り上げてくださった。しかし、苦勞して測った観測位置は、桁を切り上げられていた。後日、富山での OAA 総会 (1966 年 8 月 21 日) で先生にお会いしたとき、先生から「位置をどうやって測りましたか」と聞かれた。私は、『いや、物差しで……』と答えると「あなたは、位置天文学を全くわかってない」と怒られた。『ええ…、あんなに頑張って測ったのに……』と当時 18 歳の私には、先生の怒った意味がよく分からなかった。



写真 6. OAA 総会 (富山) で研究発表される先生, 1966 年. 座長は、火星観測の大家、故佐伯恒夫氏.



キルストン彗星, 1966 年 8 月 10 日 22 時 05 分, 200-mm 望遠レンズ, 光度 10 等級, 視直径 3' .



写真7. 淳仁天皇陵前にて、
1976年。左から太田原明氏、私、先生。

1976年8月に松戸の太田原明氏とともに淡路に帰島していたとき、先生は8月22日と23日に淡路を訪問された。特に見るべきところもない島であるが、わざわざ訪問していただけたことに私は大変うれしかった。太田原氏とともに島内にある伊弉諾^{いざなぎ}神宮、先山千光寺、淡路国分寺、五色浜、慶野の松原、鳴門海峡、そして、最後に淳仁天皇陵（前方後円墳）を案内した。そこで先生は「大きな天皇陵だねえ…。京を追われ、島に流された天皇

だったが、島人には、お上が来たと大事にされたんだろうね」と話された。

同じ年、先生から北海道旅行の誘いを受け、私の計算のパートナーであった故番野欣昭氏と北海道の大半を回る大旅行に参加することになった。北海道には、明治時代に維新政府に反抗した洲本城下の多くの人たちが流刑の地として送られている。私には、その島に淡路の血を引くたくさんの人たちが住んでいるかと思うと、それは、また別の意味で興味があった。

北海道訪問は、1972年のジャコビニ流星群をオホーツク海側の興部で大田原氏とともに観測して以来、2回目のことであった。当時は、北海道には、まだ寝台列車が走っており、このとき、初めて寝台列車に乗ることになる。日程は、9月20日に急行「狩勝2号」で札幌から釧路を経由して根室へ、9月21日には、根室、厚別、中標津、標茶を経て、網走に泊まり、9月22日には、網走から旭川、音威子府を経て浜頓別へ。そこで、武石正憲氏の出迎えを受けた。このとき、武石氏は、この地に望遠鏡を備え、天文普及やその観測に励んでおられた。この直前、先生は、同好者に「流星ノ軌道計算ト物理（A4版110ページ）」を執筆されていた。私は、この書籍を読みながらの旅行であった。列車の中で、先生から書籍に「北海道旅行ヲ共ニシテ。長谷川一郎」という署名をいただいた。この書籍は、今でも大事にしまっている。9月23日には、武石氏に浜頓別から宗谷岬、稚内と案内していただき、稚内からは、寝台急行「利尻」で9月24日06時00分に札幌に戻ってきた。その日の内に急行「すずらん1号」で、函館に移動して市内を見学し、9月25日朝に上野に帰ってきた。ただ残念なのは、この



高田屋嘉兵衛公園（同所ウェブ・サイトより転載）。

とき、江戸時代後期の北海道開拓者が淡路の高田屋嘉兵衛であることや、その銅像が函館や釧路などにあることを知らず、それらを見なかったことだった。なお、余談ながら、今では、ここ淡路にもその記念館がある。もし、来島される折があったら見学されたい。



写真8. 故シタルスキー博士と先生 (1978年)

同じ時期、私は、1978年秋から1982年にかけて洲本に戻っていた。その頃、二週間に1度の割りで、奈良西大寺にあった大先生のご自宅をお伺いして、先生から軌道論の講義を受けた。洲本から西大寺まで、片道3時間もかかる小旅行であったが、その合間に出されるケーキと紅茶がたまらなく美味しく、半ばそのための訪問でもあった。ときどき、先生のお母さんや奥様、娘さんが我々の会話に加わることがあった。そのとき、お母さんは「中野さん、この子は、海辺を革靴で歩くんですよ」と話されたことがある。私は、とっさに『あっ…、私もそうですよ』と答えると、啞然として出て行かれたことを覚えている。



IAU ニューデリー総会にて、1985年。左より、先生、故キャンディ氏、ローマー博士、私、故マースデン博士

1985年には、先生がOAA設立以来、長らく続けてきた計算課長の職をまかせてくださった。また、1994年からは小惑星課長、そして2003年からは山本速報の編集も引継いだ。同じ、1985年にニューデリーで開催されたIAU総会に私は初めて出席した。先生は、その1つ前のギリシャのパトラスでの総会(1982年開催)から出席されていた。私が会場で総会のProgram Bookを見ていると「あのなあ……、これは、こうやって利用するんだ」と教えてくれた。このとき、先生には、こんな優しい側面もあるんだと初めて知った気がする。



写真9. ニューデリーIAU総会にて、1985年。
左から長谷川先生、故キャンディー氏(パース天文台)、私。

1978年5月には、古在由秀先生のお骨折りで、東京で開催された国際天文学連合 (IAU) のシンポジウム Dynamics of the Solar System に出席させていただいた。そこで、当時ご存命であった多くの軌道計算の大家にお会いすることができた。そのとき、先生から出席されていたお一人、ポーランドのシタルスキー博士を奈良まで案内する役を頼まれ、ご自宅まで案内した。先生は、博士を奈良の遺跡や寺院に案内された。私も、この旅行に同行し、その後、シタルスキー博士とは、長く続くお付き合いするきっかけとなった。なお、博士は、2015年に83歳で亡くなられた。



私がハーバード・スミソニアン天体物理学センター（ハーバード天文台）に 1986 年から 1990 年まで研究員として勤務していたとき、1988 年にボルチモアで開催された IAU 総会にあわせて、訪米された大先生一行とお会いすることができた。この会議には、ご友人の故古川麒一郎先生、故富田弘一郎先生も出席された。多くの先生がアーリントンにある私の自宅まで足を伸ばされ、楽しいひとときを過ごした。

写真 10. ボルチモア IAU 総会にて、1988 年。左からご令嬢と故古川麒一郎博士、湯浅学博士、私、長谷川奥様、古川奥様、故富田弘一郎先生奥様、長谷川先生。

先生と同じ時期に軌道計算者として活躍された新座の大石英夫氏が長谷川先生に呼び寄せられるように 6 月 6 日に逝去された。享年 86 歳。氏は、古くから神田茂先生の元で小惑星の軌道を手計算で計算されていた。大石氏は、1988 年までに 2000 号以上の日本天文研究会計算部回報（JAMPC II）を発行されている。1984 年に大石氏のご自宅をお伺いして、『計算は、何でやっているのですか』とたずねると、「きみの『マイコン天文学 I（1983 年発行）』のプログラムを全部入れたよ」とのことだった。『ええ、そんなことしなくとも、コピーを上げましたよ』とびっくりして答えた。それ以来、氏には、小惑星データとプログラムの更新をお世話することにした。大石氏も、また、米国に所用があるごとにボストンまで足を延ばされた。あるときは、 -20°C の極寒の日に訪問され、その寒さにびっくりされていた。ご冥福をお祈りします。



第 6 回小惑星会議（名古屋）、1990 年。先生と故大石英夫氏

写真 11. 私の先生、小惑星観測者らとの会議、1990 年 9 月。前列左から故富田弘一郎先生、故長谷川先生、故古川麒一郎先生、故大石英夫氏。



米国から帰国後、2010 年ごろまでは、数か月に 1 度、神戸のご自宅を訪れて、先生のお話を聞くのが楽しみであった。それも、最近では、私の方が世俗との付き合いが忙しくなって、訪問が途絶えてしまった。しかし、先生にメールを送るごとに手紙で返信が送られてきた。大先生の弟子を指導するという精神は、少しも衰えていなかったことがうかがえた。



これまでは、軌道論について、わからないことがあれば、すぐ先生にお伺いしていた。先生は、私の無知を笑いながらも、即座に返答くださった。しかし、先生にもうこれ以上のお教えを受けられないかと考えると、今後、わからないことが出てくれば、私の能力ではとても解決できそうにない。軌道論が何も理解できてない私にとって、先生は、それほど偉大な存在であった。

喜寿のお祝い会にて
(大阪)